

My Diary

遠く遠くの小さな丘に、小さな女の子がひとり住んでいた。

草花や木々の声。山や川や湖の声。世界にはたくさんの声があふれていて、彼女はそれを聞くことができず。丘の上で耳を澄ませば、風にさざめく草木や静かに揺れる花々の歌が、麓の湖畔を訪ねてゆけば、水面の波紋や透き通った流れの歌が、彼女には聞こえてくるのだった。

けれども、夜の空に燦然と輝く小さな星々の声だけは、これまでに一度も聞いたことがなかった。

彼女はそんな彼らとおしゃべりをするのが大好きだった。草木に話しかけると、彼らはサラサラと嬉しそうに葉を揺らすし、花々に語りかけると、彼女たちは柔らかな花びらを小さく震わせて応えるのだった。

しかし、どんなに語りかけても、夜空に輝く小さな友人たちはただ静かに瞬くだけだった。

語り合うには遠すぎる距離が彼らとの間にあるのだと、それだけのことに彼女はちつとも気が付かなかった。朝靄の向こうに聞いた音、真昼の太陽が照らす丘を越えたその先の景色、そして夕暮れ時の麓の空気：温度と匂い。彼らに話したいことは山のようにあった。

毎晩、晴れている時はいつでも綺麗ですてきな彼らを見上げ、思いを募らせるのだった。

「どうすればあのすてきな子たちとおしゃべりができるのかな？」

来る日も来る日も、晴れた夜には出かけていって、彼らとおしゃべりする方法を試すのだった。

「夜空の下で、踊りをおどつてみるのはどうだろう？」草木が言えば、彼女は喜んで踊ってみせた。

「夜になったら、歌をうたいましょう。」花々が言えば、彼女は嬉しそうに星々に歌った。

それでも、小さな彼らはただ静かに瞬くだけで、彼女はちよつぱり寂しかった。

ある日には、「丘の向こう側にある大きな樹、彼の上から話しかけてみるのはいかがだろうか？」と木々は言い、またある日には、「川の向こうの山脈の鋭い峰々、彼らの上から話しかけてはどうだろう」と山が言う。すると彼女は期待に胸を膨らませて、森で一番の大樹を訪ね行き、また雲を切る山々の頂きにさえ挑んでゆくのだった。少しばかり危険な旅であっても、夜空に輝く彼らとおしゃべりするためならば、それはちつとも問題にはならなかった。

それでもやつぱり、小さな彼らはただ静かに瞬くだけ。彼女はちよつぱり寂しかった。

どれくらいの月日が流れただろうか。

草花や木々の言うことは全て試してみた。森や山の言うことも、全て試してみた。それでも、やはり小さな彼らは、変わらず静かに瞬くだけ…。

さらに時は流れて。

毎日おしゃべりをしていた木々はいつの間にか見上げるほどの大樹となって、ある日、言葉を返してくれることもなくなった。

毎日おしゃべりをしていた花々は、繰り返す季節とともに幾度も種を零し、新しい花を咲かせるとその度に、「はじめましてのご挨拶」をするのだった。

目まぐるしく移り変わってゆく世界と、時が止まったようにいつまでも変わらない自分。置いてけぼりにされているようで、彼女はすこし恐怖を覚えた。

それでもう何度目かも分からない、「はじめましてのご挨拶」。夜の空を見上げても、輝く小さな星々は、何も言わず、何も語らず、ただ静かに瞬くだけ。

彼女は、ただ寂しかった。

もう数えることができないほどの時が流れたある日、彼女は夜空を翔ける一条の光を見た。長い長い間座り込んだままでいたために、それが流星だと気づくのには時間がかかった。これまでに見たどの流れ星よりも眩しく、長く力強い尾を引くと、やがて白く燃え上がりはじめた東の空へと消えていった。

彼女は思わず大きく目を見開いた。

瞼の裏に焼き付いた流星の残像が、瑞々しい光の歌声がここらの底まで染み渡ってくると、もう長い間忘れていた感情が自分のなかで強く脈をうつのがわかった。

思わず、大きく息を吸った。

気がつけば走り出していた――。